

パ〜プル

第41号

高村昌憲 個人誌



高村昌憲・個人誌 <Takamura Masanori : Kojin-shi>

詩

しちしちにち 高村昌憲

美しい生活 高村昌憲

翻訳詩

アラン『ガブリエル詩集（八）』高村昌憲 訳

征服者

思い出

景色

グリザイユ（灰色の風景）

評論

初期プロポ断想(二十四) 高村昌憲

1 物神崇拜

2 池の蛙

3 離婚

4 真の歴史

編集後記

（表紙はサフランの花）

しちしちにち

しちしちにち

高 村 昌 憲

若い時に父を亡くしたので
葬儀のことは殆ど知らない
還暦を過ぎても焼香だけで
香典の額しか気に掛けない

その意味では幸せな毎日だった
知らないままで済んできた日々
母が亡くなって初めて分かった
七七日は四十九日目の死後の旅

美しい生活

高 村 昌 憲

職業とは与えられた使命の仕事をやり
好きでもない人間とも一緒にやること
決められた場所で殆どやることであり
決められた時間の中で美しくなること

辛かった算盤片手の数字だらけの仕事
逆説の自由が気にならなくなるまでに
残業の日々でも忘れなかった意志の人
逃げ場を無くして飼い犬になった青鬼

それでも妻子の笑い声が二重奏になると
母に似た愛情が理解できるようになった
自分よりも大切なものが沢山見えてくると
犠牲になっても誇らしく容易な行為だった

定年まで働くのが義務だと思っていたが
定年間際になって犠牲期間が三年延びた
朝の通勤だけは辛い時間になっていたが
判を押す仕事は楽に熟せて気楽になった

職務に慣れて犠牲の思いが弛緩してくると
カレンダーの数字が汚れた髪の色に見える
収入も支出も激減して家計を犠牲にすると
三八年前に夢見た生活が美しく見えてくる



征服者

あなたの弱さに似たくはなかった
承諾も優しい言葉も要らなかった
私はあなたの自由な力を愛した
あなたの足の快活な動きを愛した
あなたの物思いに耽った視線に睫毛は秘密の閃光に
素早く閉じられ 沈黙せず反撃に出た
慎重への軽蔑 鮮紅色の血液の火照り
待つ〈愛〉の矜持は滑翔するハイタカの
飛行と同類のもの そして突然の急降下

あなたのほっそりとした指で織った
ベルトと衣服を身に付けて、素敵な人の
その襞の奥深くまで作り上げた夢
そのようにしてあなたは奇妙な思考を進め
揺れる水の中で あなたは未来を抱きながら
淡い色の旗をつけた三本マストの軍艦は大気を振動させ
大きく吐いた息と塩辛い波によって自由になっていた
唯一の考えの儘に舵をとるあなたは
無視してものとも思わない泡を何度も落下させていた

私は美しいあなたを獲物にしたが そのことをよく知っていた
その時は何も予想せずに 何も考えることもなかった
多分 私が悪知恵を二倍もった海賊に期待したのは
最後には勝利者が楽しむ囚われの人であった
新しい喜びよ！

しかし 海が突然に私の頭上を
過ぎ去り 狂気を攻撃し 静脈の中で

この血液を海で育った海藻で養い
そしてあなたの鼻孔が嗅ぐのは 刺激的な香り
そしてあなたに再び生まれるのは しっかりした脈拍
そして私の中に再び認めたのは あなただけの味

(詩集のためにL・Gへ 一九二九年十月)

思い出

あなたへの愛が私の全てだが　あなたが知ったのは余りに遅い
え　何ですか　この旅と偉大なる偶然の中
そこに私たちは脆そうな小船のように放り出される
導くのは如何なる運命で　如何なる正確なふいごか
そして如何なる港か　あるいは如何なる暴風か？
簡単に上がりになるゲームとは違って
この横柄な心の中を知り得たのは何なのか？

木の葉の下の城と古い客間を
あなた思い出さるうか？　気晴らしか夢想か
スカーフの襷とすらりとしたあなたの優美な姿は
偶然の仕草を生み　あなたが演じたのは
武勲詩と思想詩で　あなたは骰子を投げた
眼を回し運命を軽蔑してあなたは投げた
偉大な魂よ　しかし魂そのものは殆ど目覚めていなかった

大空に　そして感嘆した大地を祝福して
今宵の月が蒼い世界の中に
力強い前兆を上げているのは今も同じ
銀色の光線の下に大変に確かな海の法則
砂浜の波が音をあげてかき立てている
涙と期待ともっと低俗で平凡な魂と
自分でも分からない奥深い欲望

私たちの運命の手紙はこの確かな歩みの中で書かれた
この酷い傷を真っ先に感じ
陽気に笑う閃光と突然の真面目さが生まれ
大空から両眼の愛撫と不可思議を感じるのは誰か？

親愛なる思い出よ！ 光の輝きどころではなく
曙の最初の輝きよりも懐かしい！
もしもここにあるなら 私は時々触れられるように思う
清純な大空…… 沈む月の恋人……

その時私の両手で鮮やかに洗われた肌は
陶醉した処女の燃えるような仮面を受け取っている

(詩集のためにガブリエルへ 一九二九年十月)

景色

あなたの肉体は時として何か柔らかな絹織物のようだった
散った薔薇の花が撒かれた揺りかごのように
眠る海賊には暖かで柔らかい着物
あなたは恋人のために柔らかな線の襷を作った
柔らかく忘却した友愛よ！ あなたに長い口づけを！
未練と希望と懐疑で出来ているような清純さ
私の傍に眠っているようなあなたを包み込んでいた
私は最早自分を感じることはなく 私の夢はあなただった

そして夢想の中で最後に夢が着替えるように
私が目覚めている時には愛しい姿で走り
あなたの手は多分私の腕の中を探るのが精一杯で
あなたが知らなかったのは欲望という戦慄
他の女性はあなたが伸びた姿から生まれていた
流れる一筋の水脈のように そして海の潮のように
あなたの存在は私の存在を刺激し
愛が注がれていた燃えるような布地の中で
待ち切れない力と長い自制を掘っていた

あなたはこの天空の力で服を着る幸福な女性だ！
おゝあなたはその力を全て感じ 何時も触っている！
あなたは燃えるような愛を自分で守る人
掘られたばかりの穴と曲がりくねった線
再度閉じられた思い出は忘れられたように見える
あなた自身への逃避 肉体は神秘的な襷
素晴らしく引締まったあなたの若々しい両肩よ！
私には殆どそれが見抜けず 柳の下に逃げる
水の妖精ニフのあなたは自分だけの茂みに逃げる

あなたの赤褐色の毛並みと再会する幸せ
彼女の確かな歩みには活力と不可解があり
謎であるが大変うまく身に巻かれたあなたの優雅さよ！

(この無二の手書き原稿の詩集に加えるためにL・Gへ 一九二九年十一月八日)

グリザイユ（灰色の風景）

暖かな春に疲労した薔薇の花が
惜し気もなく与えられた優雅さを地面へ傾けた時
もう決して美しい色彩を見せない
その真珠は神の蒼白さには到達せず
置き去りにされた薔薇の花から生まれる新しい曙
しなやかな線は再び活気を奪い
甘美な匂いから繊細なグラスが生まれ
後悔の棘は花粉の味気なさを強め
朝になると露の中で水に溺れる
清純というよりも愛撫を和らげて
薔薇の襞の中で大変に生き生きと震えて溷れる大気
香気の中に完全な夢の実を取り
巨大な宇宙の巨大な渦巻によって
余りに大きな力と全くの偶然との混淆

.....

真珠層の花冠と震える幸福を集め
物思いに耽っている淡黄色の私の薔薇
白い長めのオーバーブラウスの古い襞から
大洋の息吹である荒々しい動き
奇妙な水平線の新しい大洋を思い出す
昼間の炎と寒い季節があなたのために
如何に堪え難い経験を形づくり
それを望み感じるものが科学の中に入り
如何にしてその出来事が成功を乗り越えていくか
それはリズムを閉じ込め

現在もあなたはそれを知っている

あなたが運ぶのは暑い日中の荷物
私は一瞥してあなたの投げやりな態度に驚き
元気をなくしたあなたの肉体からは無声の言葉
そしてあなたの感動 心を動かす希望
あなた自身であること 毅然と横になったあなたの体の線

隠された無敵なあなたの魂を取り戻すことは
あなたの弱さでさえも信仰を確信させ
より人間的で より女性的で より私に近かった

(L・G・Lの詩集のために 一九二九年十一月十二日)

1 物神崇拜

物神論は、我が国の古代宗教の特色のように言われています。無生物である石や家具や道具などの事物の全てに魂があり、人間の意志や個性を与えるように〈神〉を感じる文化があります。それらの事物を大切に扱う点は長所と言えるかも知れませんが、反対に事物や自然現象を恐れるあまり、人間の行動を不自由にする結果にもなり得ます。それらの不自由な行動は、迷信や崇りとなったり、石や樹木や滝などを神として祀ったりして、我が国の現代社会にも影響を与え続けていますから、観念論として決して無視出来るものではないと思います。

アランにとっても物神論は、フランス社会にとって避けて通れないものの一つでした。テーブルや椅子にも神がいて、人間の行為に影響を与えます。一九〇八年一月二六日のプロポに次のように書いています。

「皆がやるように私には急いでいる時に椅子などの物を勢い良く動かす習慣があります。しかし、それらの物のうち一つでも私に激しくぶつかったならば、その時は自然な反動として馬が拍車で刺激を受けて動き出すように、私はそれをもっと速く大きく移動させますが、それは一人の証人が、私には具合の悪いものに罰を与えていると十分に信じることになるのでしょう」。

アランは子供だった時に、テーブルや本や椅子をよく人格化していて、半ズボンのボタンを兵隊にして何時間も動かして遊んでいたとのことでした。そして、これらの事実には魂が無いと決して信じなかったと書いています。子供であったアランは何人もの大人にボタンの兵隊のことを質問すれば、アラン自身が答えていたのと殆ど同じ答えを皆がアランにしていたとのことでした。

アランが質問するのは、事物に人間の意志や人格を付与する者たちが何時も遊びでやっていないかどうかを知ることが出来たからでした。しかし、歴史家はそんなにも長くそのことを考えないのが本心です。歴史家は詩を書くことを覚え、詩を文字通りに受け入れるとアランは言います。歴史にとっての史実とは何でしょうか。厳密に言うなら、この世に直線が存在しないように歴史に動かぬ証拠は無いのではないのでしょうか。時間というヴェールが過去の〈事実〉を隠匿します。現代においてそのヴェールを剥がすことが不可能である限り、歴史家が書くものは主観的な詩ではないか、とアランは言っているのです。勿論、歴史家にとっては不満であり、傍証に傍証を重ねて間違いの無い史実の把握は可能であると主張するのですが、そういう主張そのものが史実の不在を証明していることとなります。史実に主張は要りません。しかしながら歴史家には歴史という出来事を史実という事物に還元する仕掛けが必要になってきます。その仕掛けを信じるまでに実証精神というものを訓練します。その結果、事物を抽象して思考する能力と共に、それらを表現する詩人に成ります。迷信や崇りも事実である限り、史実になり得ます。従っ

てテーブルや椅子にも魂が宿ることになります。アランが書く文章も、歴史家にとってはアランのペンに魂が宿っていることになります。

「その時から、質問は事物に人間の意志や人格を付与する者たちが何時もそれを遊びでやっていないかどうかを知ることになりました。しかし、歴史家の本心はそんなにも長くそのことを考えません。彼は詩を覚え、文字通りに受け取ります。例えば私に書いて寄こすのであれば〈我が親愛なる古きペン軸〉です。千年後に歴史家はこのテキストを発見して、アランは物神崇拝者で、自分のペン軸が或る種の神と通じていると信じていたと言うのでしょうか」。

事実とは現在のものであり、事実に基づくことが歴史の前提であるなら、歴史は過去のものでないという逆説を乗り越えられなくなって仕舞います。事実であったと思われることを史実と呼んで、〈時間〉のヴェールを除去したかの如く自覚しようとしませんが、事実の重みに耐えられなくなり自家撞着に陥る時、歴史家はその責任を事物へ転化し、他の事物には無い魂を見ることによって物神論を唱える者になります。アランが歴史家を信用しない所以です。そして、歴史家も詩人に成るしかないのです。ところが自己の感情の事実を表す詩人にとっては、事物の魂は望んでいないのが殆どですが、中には詩人の目的がアニミズムにあるという詩人がいない訳でもありません。（高良留美子という詩人は、そういう意味では歴史家に近い詩人であり、事実も気になって仕方ないのだと思います。）詩句と言ひ、史実と言うが、一体何処に相違があるのでしょうか。ホメロスの叙事詩『イリアス』が表しているトロイア戦争は史実であり、旧約聖書に書かれたノアの箱船もシナイ山も史実と見做すならば、史実は歴史家が書いたものだけに限定出来なくなります。歴史が重要であるなら、それは人間が上手に行動したり判断するためである、とアランは一九一四年四月十四日のプロポに次のように書きました。

「小麦や水車小屋やのこぎりや梔子のように、それは多分最も美しい発明品には歴史が要らないという隠された法則によるものです。その代わりに最も愚かな発明品である奇跡のお話や迷信やカリブ人の信仰は、何時も歴史に依存していて、そこには何でもありますが重要なものも除かれていて、私が理解するのは上手に行動するか判断するための法則です」。

そして、〈上手に行動するか判断するため〉には、そういう技を身に付けるためには〈覚えることは忘れることである〉とアランは言います。事物に宿る魂を忘れることによって、現代に生きる歴史が自分のものになるのです。

(完)

2 池の蛙

一八六八年生まれのアランは、子供の頃にフランス革命前の旧政体時代の絵画を見て、びっくりしたことが幾つかありました。その中で特にびっくりして何時までも忘れずにいた絵画があります。それは領主が眠っている間、農奴たちが池の水を打ち続けているものでした。領主がよく眠れるように池の水を打って、蛙が鳴き出さないで静かにするようにしている処の絵画でした。こんなにも多くの人々が苦勞しているのに、領主の喜びはこんなにも小さいのです。アランが領主でその時代に生きていれば、農奴たちに次のように言ってあげたいと一九〇八年一月二七日のプロポに書きました。

「寝に行きなさい。あなた方がぐっすり眠っていると思うと、私は蛙の声が気に入って楽しくなります」。

もしアランが金持ちに成って、豪華なホテルで非生産的な生活を送っていたとしたら、その時からアランは進歩を考えて自分を慰め、そして農奴たちがもう池の水を打たないで済むことを考えます。しかし、アランにとって役に立たない勞苦でなく、自分のためになるもっと良いものを見たならば、ほんの小さな喜びであっても逃しはしないのでしょうか。具体的にアランは次のように想像します。

もしアランが金持ちであったなら、恐らく家に電話を設置したくなって、数日後にはベルが鳴って嬉しくなり、電話で質問する誰かと会話を始め、鼻声でビールとか子牛の肉を一キロ持って来させます。一九〇八年当時は、まだ電話は左程普及していなかった筈です。しかし、ベルの音、黒い受話器、壁に取り付けられた緑色のコード以外に変わったことは何もないとアランは思います。勿論、もっと良く見て下さい、鉋石からは銅が抽出されて運搬されて来ます。銅は坩堝の中へ流し込まれます。コードは伸ばされ焼き直されて、再び運搬され巻かれて、空中や地下で解かれて敷設されます。壁という壁を通過して行き、僅かな亜鉛は電池の中でも使われます。電話交換手は、電話加入者の通話時間を計ることになっています。全てがそうしたもので、ベルが鳴れば、五月蠅くて邪魔な人間や軽率な人間からのものであっても、彼らを呪う代わりに結局は平和を守るために、アランは受話器を取ることになります。それに反してアランの家人は、三個のクロワッサンと一ダースのオレンジを手に入れるために頻繁に電話をします。それは毎日を生活するために何時も用心している注意力と、それと巧妙に関係してくる努力の結果であり、アランにしてみればそういう労働のために莫大な時間を使うのでしようが、直接的に自分の利益になることは殆ど無いと言います。労働とはそういうものです。自分の利益のために行う労働は殆ど無く、習慣や模倣が必要悪を生んでいき、他人のために行うのが労働ですから、その労働による満足感によって本当の喜びは手に入れられないとアランは言います。

「この様にして習慣や模倣が必要悪を生み、その満足感は何時も本当の喜びを与えるものではありません。人々は言います、〈かくして、ほんの小さなことを変えるためにも多くのことを変えなければならないでしょう。何故なら全てはお互いに関係していて結ばれているからです〉。従

ってまさしく王制の時代には領主の言うことが正しいのです。今も、何も変わっていません。私（アラン）はそのことが良く分かりますし、蛙を静かにさせるために農奴たちは何時も池の水を打っているのです」。

このプロポはこの様に書かれて終わっています。池の水を打つ行為は小さいものかも知れませんが、その行為を止めるためには王制を廃止しなければなりません。王制である以上は〈領主の言うことが正しいのです〉から、農奴たちは習慣を止められません。つまり農奴の労働を止められません。自分に本当の喜びを与えない労働ですが、王制の時代にはそれが正しい労働であるとアランは言います。何故なら労働は自分だけの喜びではなく、全てに関係しているからです。領主が蛙の鳴き声に邪魔されないで安眠出来れば、翌朝に目覚めた領主は政治に正しい判断を下せることが可能になるからです。

民主主義の時代も同じです。大統領や首相が政治に正しい判断が下せるように警備が付きます。池の水を打つように、大統領や首相が安眠出来るようにします。警護する者たちは、警護するその行為が本当の喜びではありませんが、労働としては正しいのです。如何なる時代にも労働は必要です。何故なら自分の本当の喜びだけの生活には、社会との関係が稀薄になり、独善に陥ることが多いからです。

「この世ではあらゆる事件が起こり、絶対だと信じていたことが揺らぐことは幾らでもあります」と一九〇八年四月十四日のプロポでアランが言うように、社会が安全であるためにも労働は必要であり、その安全は人々が独善に陥らないことによって生まれます。

(完)

3 離婚

フランス人の総人口の約八〇%以上は、カトリックの洗礼を受けているとのことですから、フランスは現代もカトリックの国と言えます。カトリックは離婚を認めませんから、カトリック教徒が結婚すると、二人は原則として死ぬまで添い遂げることになります。法律的にも一八八四年まで、ナポレオン法典により離婚は禁止されていました。第二次世界大戦後も、離婚するには手続きが大変でしたが、離婚世帯は八世帯に一世帯でした。この数字はやや古い調査時のものですが、その後一九七五年に新しい離婚法が施行されて手続きも簡単になったので離婚件数は増加し、大都会では年間婚姻件数に対する離婚件数は約三〇%（一九八四年）になったとのことです。更に二〇〇五年にも離婚法が新しく施行されて、フランスにおいて離婚件数は年々増加しています。ところが正式に婚姻届を役所に提出しない若者のカップルが、一九六八年の五月危機以後年々増加しています。彼らのことをコアビタシオン（同棲）とかユニオン・リーブル（自由な結び付き）と言っています。一九八〇年代末の大都会の若者では三分の一に達したそうですが、最近のパリではカップルの半数がコアビタシオンとのこと。フランスの社会保障等が、正式に結婚した場合と同じであることも要因として挙げられていますが、やはりカトリックの教えとして離婚を認めていないこともコアビタシオンの増加に繋がっていると思われます。

サルトルとボーヴォワールの結婚は、二年間毎に「契約」を更新するコアビタシオンであったことは有名ですが、アラン自身もマリー・モール＝ランブラン夫人と正式に結婚しない儘、一九四一年に夫人が亡くなるまで添い遂げました。その後、アランは一九四五年に二十歳若いガブリエル・ランドルミーと結婚しますが、アランは七七歳で初婚ということになります。蛇足ですが、アランが眠るパリのペールラシェーズ墓地には、妻のガブリエルや姉のルイーズはアランと共に眠っていますが、モール＝ランブラン夫人の名は見当たりません。アランには離婚の経験がありませんが、内縁関係については教会も認めているとアランは一九〇八年一月三日のプロポで言っています。アランは、或るカトリック信者の言葉を次の様に紹介しています。

離婚は神が生むものでなく、人間が行うことに違いなく、アル中、遊蕩、裏切り、二枚舌、ペテン、盗み、暴力が人間に余儀なくされた時、カトリックの神が絶対的意志によって禁止しても、無くなることはなかったのです。離婚も無くなることはないに違いありません。しかし、この世のあらゆる人々にとっての道徳は同一であり、アランにとっても皆にとっても同一ですから、カトリックの人が従うのも「情熱が許容する限りの良識」でした。カトリックの人は次のように言っています。

「宗教を持たない人間は離婚が許されていると思っており、結婚には離婚がつきものだが、賢明で品行の良い結婚にすることも出来る。勿論、カトリック教徒の私は離婚が出来るとは思えないし、信じない。離婚をして結婚するなら内縁関係しかない」。

これに対してアランは次のように答えています。

「.....もしも私（アラン）が〈教会〉の真の教理を良く知っていたなら、〈教会〉は内縁関係を

絶対的に容赦なく禁じたりしないでしょう。本当のことを言うなら、〈教会〉は容赦なく決して禁じたりしません。心の底に隠された動機が最後に救われて、煉獄後に誠意ある冒瀆的な懷疑論者まで救済してくれることが可能であると何時も〈教会〉は認めて許しています。

ねえ、モラリストが恰も、神も不要、主人も不要であるとするなら、何を言うのでしょうか。離婚は必然的に許すことが出来ない間違いではないと言うでしょう。離婚後に別の人と結婚することは、有益で合理的な契約が生む結婚で美德がない訳ではないと言うでしょう。少なくとも不幸や悲しみや病気にも拘わらず、誠実な心は何よりも美しいとさえ何時も言うでしょうが、離婚することは良いとは言わないでしょう。単に、場合によっては離婚が許されると言うだけでしょ。そして、離婚しないことが最良であると何時も言うでしょう。世界中の人々がそのことについては意見が一致しています。神は何も生みませんでした」と書いてこのプロポは終わっています。

離婚は、アル中や遊蕩などと同じ様に神が禁止しても、実際にはあり得る人間の営為ですから、間接的に内縁関係つまりコアビタシオンを認めることになり、多くの若いカトリックの人々も現代のフランスにおいては正式な〈離婚〉から逃れていることになります。

しかし、離婚の問題の核心は統計上の数字ではなく、個々人の心の問題であり、自分だけは離婚しないと決意していることが大切であり、全世界同一のモラルであるとアランは言っているのです。従って、離婚は統計学上の問題として捉えるばかりでは問題の核心を逃して仕舞い、延いては離婚と不幸を乖離させて理解するという愚行を演じることになります。現代の社会学者たちの陥穽も、まさに人間の感情や意志の領域の分析を余りに無視している処から生じているように私には思われます。

(完)

4 真の歴史

「〈歴史〉は政治家たちと取巻き連中によって書かれてきました。一人の人間の計画が国民の運命を変えることが出来ると信じられているように見えますし、証明しようとしています。それは殆ど広く言われているかのようですし、一人の人間が七階から通りへ落下する時、彼が感じる恐怖とは速くなく、ゆっくりと落下して行くようなものです」と一九〇八年二月一日のプロポは始まります。歴史は客観的であろうとしても、七階から落下する人の恐怖と同じ様に、ゆっくりと落下するものであるとアランは言います。落下する人を周辺で見る人には一瞬の出来事でしょうが、落ちる本人が体感する時間は非常に長いとされています。つまり歴史には必ず主観が入ってくるものであるとアランは言います。勿論、歴史が歴史であるために、歴史を書く人は主観を排除しようと努める人も沢山おります。しかし、過ぎて仕舞った過去の出来事は如何なる媒体で介在してもその全てをそっくり完璧に再現させることは不可能であり、不可能である限り多くの主観が介在して来ます。

「私（アラン）が〈歴史〉という大嘘吐きを全て本能的に嫌悪し始めた時、私は大変に若かったです。若い王や悪しき忠告者たちは間違いを犯します。老いた王はそれらに報います。宮廷を変えます。亡命者を取り立てます。大臣を更迭したり召還したりします。王朝として同盟を結びます。交渉があり挑発があります。実際にはこれらの意味の無いことが国民にとっての本当の歴史になり得るのでしょうか」と言って、アランは歴史を信用しないことを宣言します。歴史を信用するのは〈大変に強い幻想〉であると言います。何故〈幻想〉と言うのでしょうか。その原因は分かり易いもので、過去は今ではもう存在しないということであり、その上イメージは本の中にしかなく、このイメージも歴史家たちによって創られて来たからです。〈歴史〉は彼らの偏見を考慮して証明しています。何故なら〈歴史〉は偏見が創った話以外の何ものでもないからです。〈このイメージ〉は、アランの時代と違って今日では映像も明瞭になり大きな役割を果たしていますが、基本的には過去の全てを表す映像というものも不可能です。つまり〈歴史〉のもつ記録とは何でしょうか、との質問にアランは次のように答えています。

「それは言葉です。何時も言葉であり、一人の王の言葉です。一人の大臣の言葉です。戦に勝った將軍の弁護の言葉です。寵を失った家臣が書いた批判文の言葉です。これらの話の中で意志的に嘘の部分が創られると、更に高慢な嘘として残りますし、それは全くの本心なのが殆どです」。本心からの嘘が鑿められているのです。そこに柔軟な楽観主義者たちは事件の匂いを嗅ぎつけます。その後を追って嘘でないのを望み、その望みが自分たちの肉体よりも話の中に多く持っている信じます。彼らは偉大な肉体の中の脳の如く、謙虚さを自分に与えますが、現代人は彼らよりも本を読みませんし話も聞きませんから、国民は何時も一人とか二人とかの人間に従って来た最後には信じて仕舞う、とアランは言っています。真の歴史は一人とか二人とかの人間のものではありません。賢明なのは地質学者たちである、とアランは言います。

「地質学者たちは地球上の今日的な変化を殆ど研究し始めていました。水の活動、地盤の隆起や沈下です。そして、現在の事象に過去の事象を蘇らせます。歴史家も同じことを行います。現在の変化がどのようにして生まれ、如何なる状況に依存しているのかを先ず理解します。その時、少なくとも彼は古い文書や侍従の繰り言も公平に判断することが出来るのです」。水や地盤には王や将軍はおりません。しかし、それでも現代を形づくっているものは存在しているのであり、歴史においても現代を形づくっているのは一人の農民であり、一人の兵士である、とアランは言います。

「一人のノルマンディー人の農民を調査してご覧なさい。素直な頭で本を読もうとしてご覧なさい。彼らの愛情や興味や意見が行為と共に如何に満足し得るものであるかを見抜いて下さい。そこには現代の歴史の一頁があり、一人ひとりが一人の王同様に重要であることを良く知って下さい。一人の兵士の怒りが戦争を起こすのです」と書いて、このプロポは終わっています。

現代の我が国も竹島や尖閣諸島の領土問題が、テレビや新聞などで大きく取り上げられています。戦争を起こすのは〈一人の兵士の怒り〉であるとアランは言っています。戦争を起こすのは政治や経済の領域の問題ではなく、個人の領域の問題であり、文学や芸術や音楽の領域の問題でもあります。つまり歴史に重要なのは国でも社会でも政党でもなく、一人ひとりの人間の言葉が歴史を決定して行くのです。従って戦争を起こすことは悪であると思える者は、一人ひとりの心に怒りを助長させる言葉は吐くべきではありません。況して小説を生業として来た政治家が、その本分を忘れたように一人ひとりの心に怒りを掻き立てるような発言には大いに反省して貰いたいと私は考えます。文学者には気品が大切です。何故なら、文学者の本領は個人としても見知らぬ人々と心から交流出来ることが長所でもあり、気品はそのために必要な資質でもあるからです。そのような資質を喪失させた文学者は、既に見知らぬ人々との交流を放棄して、戦争を志向する政治屋に変貌したのと同じです。顔見知りの〈お仲間連中〉とお祭り騒ぎをしているだけなら良いのですが、マスコミが顔見知りの〈お仲間連中〉の拡大に一役買っているのですから、多少不気味で始末が悪いと感じているのは私一人でしょうか。

(次号へ続く)

編集後記

◆九月三日（月）に東京・飯田橋の「まんなか屋」で開催された「語学友の会」に出席した。北京の大学で日本語の授業を受け持っているF氏が一時帰国したので、中国の現状を報告して貰った。F氏によると、我が国のマスコミは尖閣諸島問題で大騒ぎだが、北京市内は至って静かとのことである。（但し、独りで外食する時などは万が一を恐れて〈香港人〉を装っているとのことである。）やはり領土問題で騒いでいるのは、貧富の格差に不満を持つ失業者たち、外敵を強調して政権の安泰を企んでいる者たち、あるいは衆議院選挙のための世論操作をしたい者たちの力も働いているのではないだろうか。そして、それらをマスコミが煽っているようにも感じられる。つまり領土問題の真の原因は、両国の国内問題にあるように思われる。従って、相手国のことに対しては極論めいた内容の発言をしないことが得策であり、「入って来たらやっつけろ」と言う高齢でありながらも品格のない政治家は、却って国益を損ねているように思えてならない。

◆「語学友の会」にはF氏の外に、既に女子大学などでパソコン操作などを教えている非常勤講師のOさんがいる。日本語を研究する道へ進もうと二つめの修士号を取得するために大学院へ通っている頑張り屋さんである。Oさんたちの調査によると、日本語教師たちはワープロ、電子メール及びインターネットはよく使えるが、「素材を加工するための画像編集ソフトや音声、動画編集ソフトなど」は十分に活用されていないとのことである。これは「日本語教師の養成課程にはICT活用の実技項目が含まれていない」ことが要因の一つに挙げられている。その外に私は、日本語学習の主眼がコミュニケーション力の向上に当てられていることも、その要因になり得ると思っている。やはりパソコン相手だけの授業では、日本語による会話能力などはなかなか十分に養成されないだろうと思う。ICT活用と会話能力の向上は一見すると二律背反する問題のようだが、Oさんも提起しているように「具体的なカリキュラム開発」によって架橋出来ることを期待したい。

◆九月十六日（日）に東京・吉祥寺の「清龍」で開催された「サラダ会」へ出席した。高校時代の友人の集まりである。9・11の同時多発テロから奇跡的に免れたニューヨーク在住のMさんとも約四十年振りにお会いした。勤務している事務所が世界貿易センタービル内にあり、たまたま外出していた時の出来事だったらしい。逃げる方向も間違っていたら大変な目に遭っていたらしい。日本の新聞社から取材されたが、記事の内容は全然別の内容になっていたとのこと、まさに我が国は捏造社会で少々ゾツとした。今回は一時帰国とのこと、公認会計士になって働くニューヨークのOLらしい雰囲気は身に付いていた。当日は八名の集まりであったが、一人ひとりが近況報告を行う暇も無く、二次会にも全員行ったが、あっという間に時間が来て散会した。人生の中で一番多感な時代であったと思う高校時代の友人とは、やはり気が置けない処が良い。ニューヨークのOLも一年半後には帰国して日本に住むと言う。今後は〈去年の雪〉を懐かしむだけでなく、偏狭な独善に陥る頑固で哀れな老人に成らないためにも、お互いが知らない知識

や情報を交換し合える新しい交流の場に発展すれば良いと思う。

◆十月十日（水）に東京・恵比寿の日仏会館ホールで開催された早稲田大学名誉教授市川慎一氏の講演「ギョーム・クールテ（1590-1637）——日本に初めて来たフランス人」を聴講した。ドミニコ会会士のクールテは、一六三六年に日本に渡来したフランス人で、翌年に長崎で殉教した。純粋にキリスト教の布教のために来日して命を落とした宣教師たちの物語は、レオン・パジェス『日本切支丹宗門史』や遠藤周作の小説『沈黙』などに詳しく書かれているが、それを偉業と見る眼と恐怖と見る眼があるように私は思う。前者は宗教家や信者たちに多く、後者は功利主義者や実証主義の歴史家たちに多いだろう。しかし、市川氏の講演を聴いていると、少なくともクールテの生涯は美しいものであったと思う。強国の覇権主義とは無縁であったに違いないと推測した。何故なら人間性の中から見えてくる〈美〉には必ず自己犠牲とか無私が伴うからであり、自己犠牲が感じられる人を見ると誰もが美しいと思うに違いないからである。南仏のベジエ近くにある生地セリニャンの町では、クールテは死後に多くの人々に崇拜されて立派な像が建ち、〈ギョーム〉という名が付けられた男の子も年々多くなっていったとのことである。

◆パープル第四二号は二〇一三年五月二日に発行予定である。

高村昌憲個人誌 パ〜プル 第41号

(2012年11月21日登録)

<http://p.booklog.jp/book/60331>

編集・発行人：高村昌憲

編集・発行人プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/60331>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/60331>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ